

週刊センターニュース No.210



第210号(2008年6月9日) 毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第186回共同学習会のご案内

日時：6月12日(木) 16時30分～18時

場所：角間キャンパス総合教育1号館 2階大会議室

報告者：渡辺 達雄(大学教育開発・支援センター)

テーマ：AO入試について考える

内容：先月16日に、東北大学で開催された第9回高等教育フォーラム「高校教育と大学入試：『AO入試』の10年を振り返る - 接続関係の再構築に向けて - 」での報告・議論にもとづき、日本におけるAO入試の現状と課題(東北大など事例紹介も含め)と、高校側の立場などについてみていく。その上で金沢大学のAO入試の状況を踏まえ、今後のあり方について一緒に考えていきたい。

○ ○ 大学教育学会第30回大会参加報告 ○ ○

2008年6月7～8日、目白大学において大学教育学会第30回大会が開催された。この紙面では、ラウンドテーブル「大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する日本語表現能力育成の可能性 - 専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える - 」について報告する。

このラウンドテーブルでは、学生にアカデミック・ライティングの能力を獲得させるまでに立ち塞がる問題、実践している指導法についての議論が交わされた。

まず、東京大学留学生センターの二通先生より、学生のレポート作成上の問題点が示された(表1)。左の列は留学生へのインタビューで得られた結果であるが、「留学生が感じる問題点は日本人学生にも共通の問題」と二通先生は指摘する。また、「データの限界に関する関心が薄い」という問題に関して、「意見について自分が引用する部分だけを読んで鵜呑みにしてしまう。なぜそうなるのかを考えず、自分に必要なところだけを切り取る」といった学生の思考に触れ、「引用のルールだけを教えても、剽窃はなくなる」と警鐘を鳴らした。そして、ライティング能力を身につけさせるためには、「読んで得た情報を取り上げながら意見を述べるような、『読むこと』と『書くこと』を結びつけた意識的な練習が必要」と強調された。

表1. 学生のライティングにおける問題点

留学生へのインタビューより	教員へのインタビューより
・レポートの経験がない	・基礎的な訓練がなされていない
・目標とするイメージがない	・読書力の不足
・提出後のフィードバックがない	・文献・資料に対する批判的な態度の不足
・読解力の不足	・学習に対する主体的な姿勢に欠ける
・論理の組み立てることが難しい	・日本語力の問題
・日本語の語彙や表現の不足	・特定の文献だけに頼る
・専門の内容に関する背景知識の不足	・本から丸写しする
	・批判的な読みができない
	・データの限界に関する関心が薄い

注) 筆者が発表内容から表にした

次に立命館大学アジア太平洋大学の山本先生より、アカデミックな文章の構想段階での支援方法についての発表が行われた。レポート作成の構想段階での可視化が重要と捉え、2つのステップ(4～5つの小ステップを含む)を踏ませるとのことであった。ステップ 1 では「課題発見からテーマの絞り込み」で、(i)関心あるテーマは何か、(ii)そのテーマでレポートが書けるか、(iii)特にどんな点に関心があるのか、(iv)一番主張したい点はどれか、(v)仮説によるテーマの確認 をスピーチや討論を通して言葉にさせる。ステップ 2 は「アウトラインを考える」で、(i)キーワードの選択、(ii)根拠になる情報の収集、(iii)情報カードの分類・整理、(iv)アウトラインの論理的構成 を可視化させる。この実践では、テーマへの関心、自分の考え、根拠などを徹底的に問いつめ、情報カードというツールを用いて論理構成をつかむ訓練を行っており、レポートの書き方というよりレポート作成の手順を身に付けさせるといった点でかなり具体的だと感じた。

3番目に日本赤十字九州国際看護大学の因先生より、「文書スキーマの欠如」という観点から発表が行われた。このスキーマが形成されていないために論理的感受性が弱く、書いているうちに主題の変更が起こったり、接続詞の前後でつながりが悪かったりする。因先生は文書スキーマを形成し、文章完成までの手順を構想する力を獲得させることが必要だと提案された。そして、文書スキーマ形成を援助するために 論文の構造・表現の分析作業、 不適切資料の分析、 共同作業・相互援助活動の取り組みが有用であると紹介された。

最後に東北大学高等教育開発推進センターの佐藤先生より、論述パターンと言語形式の提示に関する実践報告と提案がなされた。実際に文章を書くとなると、学術文章としてふさわしい論述パターンや言語形式が分からないために書けないという問題が起こる。そこで各分野で定評のある論文をサンプルとして解析させ、分野特有の論述パターンや言語形式を学ぶことが有効とのことである。

これらの議論を受け、筆者は導入教育としてのレポートの書き方をもっと強化すべきではないかとの感想をもった。これは議論でも取り上げられた入学までの文書作成の経験にも起因する。ほとんどの高校生は学術的文章の作成を経験していない。読書感想文や日記、小論文ならば執筆経験をもっているが、読書や日記では情緒的な面を主としており、小論文でも自身の体験と得た知識をもとに主観的な主張する機会が多い(試験時間に持ち込みが許されていないことを考えてみてほしい)。つまり、他者との位置づけを明らかにしながら、問題点を設定し、客観的な評を述べる訓練は皆無に等しい。初等・中等教育における作文指導の多くが国語の時間に行われ、情緒的な感性を磨くことに重きを置いているからかもしれない。

また、高校で行うレポートはいわゆる「調べレポート」が多いそうだ。例えば、「環境ホルモンについて調べよ」というテーマがあり、指定された文字数以上の説明を教科書から抜粋すれば、それでパーフェクトな解答であった。当然、そこには学術的な位置づけもオリジナリティのある問題提起も不要である。知らない単語が何かを調べてくることが主な目的であった。

こうした背景から大学生になって「学術的なレポート・論文はこうだ」を聞かされるだけでは、最初を書くであろう「1. はじめに」の段階で要領を得ず、強く戸惑いを感じると考えられる。レポート嫌いを減らしていくためにも、「オリジナリティとは何なのか?」、「主張やそれを支える根拠が妥当なのか」、といったプロセスを、入学後 早い段階でしっかりと踏ませる必要があるのではないだろうか。

(文責 FD・ICT教育推進室 末本 哲雄)